

新しい授業実践と教師

森田 真樹(本学教職研究科教授 国際教育 教科教育学)

国際理解教育の分野で優れた実践をされている先生が、生徒から次のようなことを言われ反応に困ったことがあるそうです。

「先生たちは、『あなたたちはどうする?』

『あなたたちはどう考える?』と生徒にばかり

聞くけど、それってずるくないですか」

生徒からのこの鋭いツッコミは、正解のない現代社会の諸課題について教師が探究していないという意味ではなく、教師自身が探究した過程や成果を、生徒と同じ土俵で語っていない教師のスタンスを指摘したツッコミでしょう。

「主体的、対話的で深い学び」「探究的な学び」「自分ごと化」などの必要性が様々に叫ばれる中で、児童生徒が主体的に学びに向かうこと、正解のない問題について児童生徒なりの最適解を導き出すこと、現代社会の諸問題を「他人ごと」ではなく、「自分ごと」として捉え、自分にもできることを考えさせる実践が増えつつあります。

新学習指導要領の前文で明記されたように、これからの学校では、児童生徒が「持続可能な社会の創り手となることができるようにする」ことが求められています。これは「現代社会の問題を自らの問題として主体的に捉え、人類が将来の世代にわたり恵み豊かな生活を確保できるよう、身近なところから取り組む(think globally, act locally)ことで、問題の解決につながる新たな価値観や行動等の変容をもたらす、持続可能な社会を実現していくことを目指して行う学習・教育活動」とされるESD(持続可能な開発のための教育)の理念の反映でもあります。ちなみに、ESDの認知度は、以前に比べ高まっていますが、ESDの考え方は、2002年の「持続可能な開発に関する世界首脳会議」で日本が提唱したものであることの認知度はまだまだ低い状態です。

ESDとの関係でも、児童生徒が主体的に探究する実践が増えていくことは望ましいのですが、その実践に、教師はどういったスタンスで臨めばよいのでしょうか。<令和の日本型学校>の諸議論やOECDのEducation 2030プロジェクトをみても、探究型の学びを支える教師の姿は、指導書に基づく計画を着実に遂行する教授者としての教師像ではなく、児童生徒の探究的な学びをファシリテートする教師像だといわれます。

新聞の紙面を見ると、収束の兆しのみえないウクライナの問題、深刻な状況のガザ地区の問題、気候変動に関わる問題をはじめ、政治、経済、社会、文化などの諸課題が現代社会に山積していることが分かります。これらの諸課題について、教師は「主体的、対話的で深い学び」をしているのか。日ごろから社会の諸課題を「自分ごと」ととらえて、社会参加しているのか。そこには、「正解」を効率よく伝達する教師としての「私」ではなく、正解のない問題を児童生徒とともに語り、探究する教師としての「私」がいるのか。主体的、探究的であることを強要する学びになってないか。どれもこれからの教師の姿として本質的な問題でしょうが、いずれにしても、教師は「全てを分かっている」「全てを知っていなければならない」ことを暗黙の前提にして授業を構想する発想から脱却し、教師も学習者として児童生徒とともに学び合いながら、探究的な世界を生成する授業に転換しなければ、真の意味での探究的な学びの実現にはならないのではないのでしょうか。

従来の授業スタイルには限界があり、自身の授業を変えなければならないと感じながらも、「何をどう変えればよいのか分からない」というモヤモヤ感の中で日々の授業に向かっている先生。「経験的に構築した自分の型」を支える価値的前提やその功罪に無自覚な先生。いつの間にか「教科の壁」「旧来の学校文化」という呪縛に囚われている自分に薄々気づきながらも、その呪縛から解放されること自体に戸惑いを感じている先生。正解のない問題を扱う実践に関わることに躊躇し、「自分の『教科』には関係ない」と思い込むことで納得しようとしている先生などは、案外多いのではないのでしょうか。

これから求められる探究型の新しい授業を実践するためには、モヤモヤ感を抱えながら日々の授業を繰り返すより、思い切って、その一步を踏み出して教職大学院に進学し、自己の成長・変容を促すことが最短ルートかもしれません。立命館大学教職大学院は、全国各地で勤務をしながら、オンラインの受講で修了できるしくみを整備し、モヤモヤ感を抱える現職教員同士が、これまでの自分の実践と向き合いながら語り合い、最新の「理論」や「実践」と真摯な姿勢で対峙しながら、現職教員の成長と変容を支援する大学院です。